

## 宮地英敏著『近代日本の陶磁器業 －産業発展と生産組織の複層性－』

山田 雄久 (Takehisa YAMADA)

帝塚山大学経営情報学部 准教授

日本における近代陶磁器業の展開について、経済史・経営史研究として世に問う書物とし、新進気鋭の著者が取り組んだ意欲作である。産業史研究で議論されてきた在来産業論の再構築を目指し、大・中・小の複層性に着目しつつ陶磁器業のケースから、新しい産業発展の様相を描き出した点に本書の特徴があるといえよう。日本の陶磁器業において中心的な役割を担い続けた名古屋・瀬戸・美濃の陶磁器業について分析を進め、近代陶磁器業の形成過程を明らかにすることで、陶磁器業の分析が魅力的な研究対象であることをわれわれに示してくれている。評者は近代移行期の陶磁器業について、市場戦略や製品開発の視点から研究を進めているが、宮地氏が日本の主要産地に関する経済分析を試み、従来の産業史研究のなかで位置付ける作業に挑戦し、集大成されたことに深く敬意を表したい。

序章「[在来産業]論から複層的生産組織論へ」では、中村隆英氏の在来産業論について再検討を加え、大経営・中小経営・小零細経営として、生産組織の3形態がみせる関係性に注目しながら議論を進めている。従来の大経営と小経営の中間に中小経営を位置付け、陶磁器業の発展において以上の3形態が有機的に関連しながら複層的な生産組織が形成されたと主張している。洋食器や日用の和食器、そして高付加価値の美術陶磁器など、多様な製品を生み出した陶磁器

業においては、従来とは異なる産業の発展類型が提示できるとする興味深い分類を行っている。そして本書における分析作業の前提として、陶磁器業の前史とマクロ的な推移について説明がなされている。

第1章「歴史的および技術的前提」では、磁器生産の工程について技術的な説明を丹念に行い、産地における製造工程の違いについて整理している。第2章「近代日本陶磁器業の概観」では、陶磁器産地ごとの生産量や製品市場の変化について概観し、とくに輸出市場の発展について明治期以降の変化と輸出商の動向から説明を試みている。宮地氏は評者の論点についても言及されており（本書、46～47頁）、幕末期の長崎貿易でみられた陶磁器輸出の限界を指摘されている。本書と同時期に陶磁器流通の研究を集大成された山形万里子氏<sup>1</sup>と評者の見解に違いがある点を取り上げ、陶磁器輸出額の長崎貿易全体に占める割合が小さかったことを指摘している。肥前陶磁器業<sup>2</sup>に占める有田皿山の生産量自体に限られることを前提に議論を進めると、肥前陶磁器業の中心的位置を占めていた有田皿山の窯焼にとって、幕末期に輸出市場が生産量を拡充するうえで重要な意味を有したこと、幕末期の陶磁器輸出が佐賀藩の流通統制下におかれた状況から、維新时期に入ると有田の貿易商人が長崎で外国商人に直接陶磁器を販売し、長崎に続いて横浜での陶磁器輸出に乗り出

して売込活動を展開した点を評者は重視するものである。改めて、有田貿易商人による陶磁器輸出の拡大が肥前陶磁器業の発展にとって重要な契機となったことを強調しておきたい<sup>3</sup>。

さらに第3章「美術陶磁器輸出の隆盛と挫折」では、明治政府の直輸出政策下で重要な役割を担った起立工商会社の陶磁器輸出について再検討を行っている。政府融資によって生糸・茶・雑貨輸出の拡大を成し遂げた本社については、評者も有田の精磁会社に関する検討作業でかつて取り上げたことがある<sup>4</sup>。放漫な経営ゆえに生糸・茶取引で失敗した起立工商会社の挫折が、日本の陶磁器輸出にとって一つの転換点となったことは事実であるし、角山幸洋氏が明らかにしたように、直輸出商社としての先駆的役割を担った点について一定の評価を与えるべきであるように思われる。宮地氏が指摘するように、欧州市場の停滞とアメリカ市場の発展という事態に対応する形で、政府融資へと依存した起立工商会社の経営を前提としながら、アメリカでの直輸出を拡充した森村組が陶磁器輸出に乗り出し、現在オールドリタケと呼ばれる数々の美術陶磁器を海外で売り込んだ事実について、今後さらに検討を重ねる必要がある。

同様のストーリーとして、第7章「先駆的な機械制大工業化の失敗」では、精磁会社や京都陶器会社の試みについて、いずれも失敗のケースとして援用されているが、美術陶磁器の有力産地であった有田や京都において、フランスのリモージュ式製陶機械を導入し洋食器の量産を試みた経緯については、当時の時代状況のなかでとらえるべき問題が含まれているように思われる。有田の精磁会社が辻家による磁器タイル生産や有田工業学校における技術教育へと直結し、京都陶器会社が松風嘉定による特別高压磚子の生産を生み出したことから、明治中期における大工場の経営が後の硬質陶器生産を可能にする上での技術を生み出す要因となったと考えることも可能であろう<sup>5</sup>。洋食器生産における硬質磁器技術の開発については、明治20年代の有田や京都だけでなく、同様に名古屋や瀬戸で

も緊急の課題として受け止められた。

第8章「近代日本陶磁器業における大企業の成立」では、森村組の海外直輸出に関して、同社の経営帳簿から検討を試み、必ずしも森村市左衛門による独立自営の精神のみで成功したとは必ずしもいえず、ニューヨークでの売り込みに従事した森村豊や村井保固によるリスク管理が重要であったこと、日本陶器会社の設立と洋食器生産については森村のパートナーであった大倉孫兵衛や大倉和親による黒字化の努力が不可欠の条件となった事実が明らかにされている。このような動きの背景として、日本陶器会社をはじめとする名古屋の陶磁器企業も、京都や有田の陶磁器企業と同様の課題を克服しながら、近代技術の導入を試み、市場のニーズにあわせた製品を開発したこと、江副孫右衛門といった東京工業学校出身の若い技術者が試行錯誤を重ね、西洋の技術を日本の陶磁器生産に適用することに情熱を傾けた結果、硬質磁器生産を軌道に乗せて経営の安定化をはかることに成功した事実についても一定の評価が加えられてしかるべきであろう。

それは、松村式石炭窯の普及を取り上げた第6章「近代日本陶磁器業における技術導入」での議論とも関連してくる。宮地氏は瀬戸・美濃地方における石炭窯焼成実験が明治30年代にスタートし、松村八次郎が同時期に石炭窯の焼成実験に成功したことで、燃料費の低減を実現した点を明らかにしたが、それらは京都陶器会社や日本陶器会社が導入した洋食器生産のための石炭窯焼成とは別次元での動きとみなされるという事実を指摘している。一方で輸出品である洋食器の生産を可能にした石炭窯の技術は松村式石炭窯では達成が不可能なこと、硬質陶器生産に必要な石炭窯については、松風陶器会社の経営に関与した北村弥一郎や、初期の日本陶器会社を支えた飛鳥井孝太郎による石炭窯焼成実験が当初きわめて重要な取り組みとなり、以後日本の陶磁器企業にとって不可欠な生産技術となっていくのである。陶磁器産地で普及した松村式石炭窯は燃料節約的な技術として活用され

たが、戦間期に瀬戸・美濃地域で盛んに洋食器を生産する時期に入り、真っ先に改良が加えられてしまう運命にあった。

以上のように評者は本書の論旨について若干の疑問を持ちつつも、名古屋出身である宮地氏ならではの興味深い叙述が随所にみられ、従来の陶磁器業史研究の水準を引き上げる大変貴重な成果を提示された点について、高く評価したい。第4章「近代日本陶磁器業と小零細経営」における窯屋経営の分析は実に明快で、生産組織の側面から陶磁器産地の分析を試みた労作となっている。この視点を用いて、第5章「近代日本陶磁器業と中小経営—瀬戸陶磁器業を事例として—」では瀬戸と美濃の両地域における産地特性について検討を加え、続く第6章では美濃・多治見地域について工業学校や同業組合の動向とも関連付けながら詳細に説明を行っている。そして第9章「両大戦間期における日本陶磁器業の変質」では、名古屋における大工場と陶磁器輸出問屋との攻防、輸出問屋に製品を供給した瀬戸・美濃の窯屋経営について、産地レベルの経営史料が十分確認できない状況の下で分析を試み、幅広い工程間分業が成立した経緯について丹念にたどりながら新たな論点を提示している。

本書は近代陶磁器業の展開について産地レベルでの動向に焦点をすえて議論を試みた画期的な研究書であり、随所に陶磁器製品の写真も添えられ、単なる経済分析の書物としてだけでなく、産業史研究や経営史研究の魅力を一般の読者へと伝える書物となっている。多くの方々が本書を紐解かれて近代陶磁器業の魅力に触れられ、今後陶磁器業に関する経営史研究が一層進展していくことを期待するものである。

(名古屋大学出版会、2008年、400頁、6930円)

#### 【注】

- 1 山形万里子『藩陶器専売制と中央市場』日本経済評論社、2008年。
- 2 肥前陶磁器は、平戸藩領内で生産された平戸焼や大村藩領内で生産された波佐見焼、さらに佐賀藩武雄地域で生産された唐津焼と、有田皿山(内山・外山・

大外山)で生産された有田焼で構成され、そのなかでも徳川期には、有田皿山の中心地域である内山を中心として輸出陶磁器が製造された。幕末期には有田皿山の周辺部で作った輸出陶磁器の素地を仕入れ、内山の赤絵付業者が多彩な絵具で彩色した貿易品を製造していた。

- 3 有田は幕末期に陶磁器輸出を通じて高級美術陶磁器へと主力商品をシフトさせていく。近代移行期の肥前陶磁器業については、本書に登場する松村式石炭窯の焼成実験にも立ち会った中島浩気が後世の人々へと書き残した『肥前陶磁史考』(肥前陶磁史考刊行会、1936年、復刻版：青潮社、1985年)を参照のこと。
- 4 拙稿「明治前期陶磁器産地における機械導入—肥前有田町精磁会社の海外直輸出—」『大阪大学経済学』45-1、1995年、44頁。
- 5 Takehisa Yamada, 'The Export-oriented Industrialization of Japanese Pottery: The Adoption and Adaptation of Overseas Technology and Market Information', Masayuki Tanimoto ed., *The Role of Tradition in Japan's Industrialization*, Oxford University Press, 2006, pp.227-230.